

出石城下町の歴史

出石城下町は、江戸時代に入った慶長9年(1604)ごろ、出石藩主小出吉英(こいでよしあき)が有子山頂の山城を廃し、山麓に平山城(出石城)を築いた時期に、城を中心として本格的な整備が行われました。藩主の小出氏は9代、約100年間続きましたが後継ぎがなく断絶し、元禄10年(1697)にこれを次いだ松平氏は、すぐに宝永3年(1706)に信州上田の仙石政明(せんごくまさあきら)と国替えとなります。以後仙石氏は7代にわたって出石藩を治め、明治に至っています。

但馬を代表する5万8千石の出石藩は、宮津、篠山とともに三丹地方きっての雄藩として知られるようになり、その城下は出石城下三千軒と謳われた文化商業の中心地となりました。

城下の町数は町方17町、武家町が9町。町方の人数は、明和8年(1771)5713人、文化12年(1815)4920人、天保11年(1840)4499人でした。また、当時の家数は、明和8年1411軒、文化7年(1810)1320軒、天保11年1399軒(町方、社寺、水上村、長砂村含む)でした。なお、明和8年の町家の職業構成は、大工が68軒で最も多く、次いで魚屋32軒、桶屋26軒、酒屋23軒などと続き、特に鋳物、鍛冶屋が多く、鍋、釜などの鋳物生産については、但馬国の中心地をなしていました。



豊岡市出石伝統的建造物群保存地区の概要

有子山(ありこやま)の北麓に位置する出石城下町は出石城を中心として広がります。文化年間の城下町絵図によると、城を中心に上級武家屋敷を配し、内堀を巡らせ、外には町屋敷地、さらにその外側に旧出石川と谷山川を挟んで下級武士町を置いています。城下町における保存地区の範囲は、城跡及び町屋敷地を含む、東西約600m、南北約620m、面積約23.1ヘクタールに及びます。

現在でも保存地区内は江戸時代の城下町の街路構成がよく継承されていて、中心部では道路の幅員も近世のままで、ほとんどの町名も残っています。宅地割りも、保存地区全体の4割が近世のままの短冊形を残しており、八木の西側地区と田結庄に至っては6割の区画が旧態を保持しています。

しかし、保存地区は単純に城下町のまちなみというわけではありません。出石城下町は明治9年(1876)に大火に見舞われ、町の大半を焼失します。その後、江戸時代の町割の上に、その時代の伝統を引き継いだ建造物群が建築され、近代の城下町とでもいべきまちなみが形成されたのです。

保存地区は、城下町の歴史的風致を今日によく伝え、平成19年(2007)12月4日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。



ナカノマ・通り土間上部の吹き抜け



二階ミセから通りを見る(八木)



重要伝統的建造物群保存地区

出石城下町のまちなみ



辰鼓楼(しんこうろう)と出石城跡

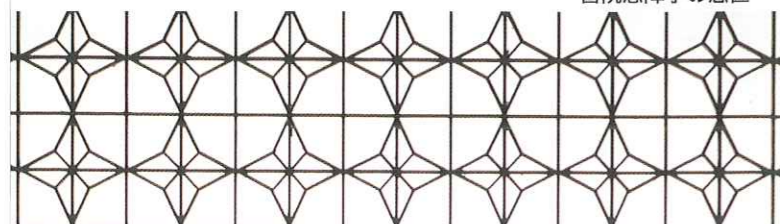
うちまち内町 城の中に成立したことが町の由来です。城内三の丸とも呼ばれ、藩政の中枢部であると同時に藩主や家老など最上級藩士の居住区でした。

出石城下町のまちなみ

伝統的建造物の主体となっている町家の平均的な間口は2~3間で、1列3間取り(ミセ、ナカノマ、ザシキ)を基本とします。ナカノマには箱階段、囲炉裏、神棚が配置されることが多く、ナカノマから通り土間にかけて天井を吹き抜けとし、タカと呼ばれる収納空間が3階部分につくられます。また表構えに設けられた格子、腕木(うでぎ)及び持ち送りの装飾、虫籠窓(むしこまど)、卯建(うでつ)などが外観意匠の特徴となっています。

保存地区にはこれに加え、辰鼓楼、武家屋敷、神社、寺院、酒蔵、近代洋風建築である旧郡役所建物(明治館)や旧出石郵便局、産業遺産の織物工場など多様な建造物もよく保持されていて、歴史的景観をより豊かなものにしていきます。また、城下町を取り囲む豊かな山々や河川などの自然景観も昔のままに残されています。

書院窓障子の意匠



交通のご案内

車・観光バス

- 大阪・神戸・京都から約3時間
- 姫路から約2時間

電車

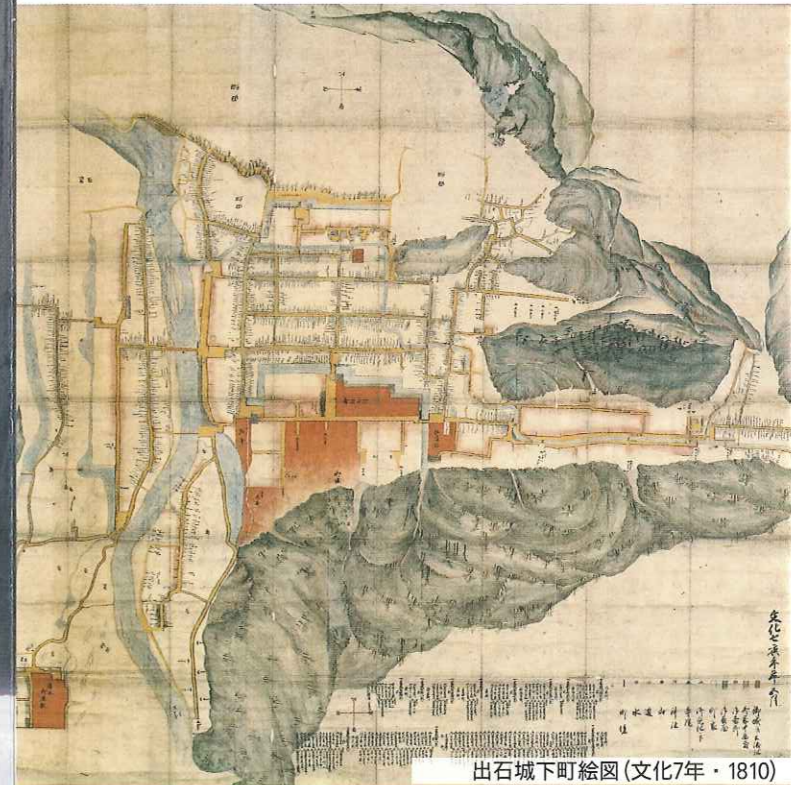
- 京都方面から約2時間30分
JR山陰本線「特急きのさき」にて豊岡・江原・八鹿駅下車
全但バス、出石行きで約30分
- 大阪方面から約2時間30分
JR福知山線「特急北近畿」にて豊岡・江原・八鹿駅下車
全但バス、出石行きで約30分

飛行機

- 大阪国際空港(伊丹)からコウノトリ但馬空港まで約35分
空港から全但バスで豊岡駅まで約15分
出石行き乗り換え約30分

お問い合わせ

豊岡市教育委員会文化振興課
〒668-8666 兵庫県豊岡市中央町2-4
tel : 0796-23-1160
fax : 0796-24-4669
e-mail : bunka@city.toyooka.lg.jp



出石城下町絵図(文化7年・1810)